

連合農学研究科

I 研究水準 研究 6-2

II 質の向上度 研究 6-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、平成 16 年度から平成 19 年度の教員一名当たりの論文・著書等は、年 2.9 件である。国際学会における発表は、研究科全体で年約 100 件である。研究資金の獲得状況については、平成 19 年度の科学研究費補助金の採択率は 43%、採択件数は 62 件、採択金額は 1 億 7,259 万円である。共同研究、受託研究、奨学寄付金においては、総額 4 億 5,492 万円を受け入れていることなどは、相応な成果である。

以上の点について、連合農学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、連合農学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、農学全般において、質の高い研究がバランスよく行われており、多岐にわたる学会賞を受賞している。なかでも、糖鎖合成法を生命機能の解明や医療への応用を目指した研究は、科学研究費補助金基盤研究 (S) に採択され、さらに、世界トップレベル研究拠点「物質－細胞統合システム拠点」のサテライト機関として選ばれている。また、植物の酸性土壌耐性遺伝子の発見は、産業上、極めて有益な研

究である。また、21 世紀 COE プログラム「衛星生態学創生拠点」に選定されている。社会、経済、文化面では、食品鮮度管理士という新たな食の安心と安全に繋がる制度提案とその実施で社会的成果が高い。これらの状況などは、優れた成果である。

以上の点について、連合農学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、連合農学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が 1 件、「高い質（水準）を維持している」と判断された事例が 1 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。